

# 全学共通教育の令和2年度実施に 向けた研修会（FD）報告

## 大学教育基盤センター調査研究部編

本年度は、昨年度と同様、第二部でいくつかの分科会を設定するのではなく、一つのプログラムに全員が参加する形式をとった。第1部では、現在、全学共通教育で進行中の取組について理解を深めることを目的として、3つの報告がなされた。続く第2部では、経済学部岡田徹太郎教授の導きのもと、参加者が、アクティブラーニング型学習を導入するための「テクニックとマインド」をワークショップ形式で学んだ。

日時：令和元年12月3日（火）13:10 – 16:10

場所：第1部 教育学部331講義室

第2部 教育学部332講義室

対象：全教員（特に令和2年度全学共通教育担当予定の教員）

### 第1部

1. 開会の挨拶
2. 全学共通科目に関するDRI教育の新規プログラム及び変更点
3. 主題B科目の実質化とデザイン思考教育
4. 第4期中期計画を見据えた全学共通教育にかかる課題の抽出について
5. 全学共通教育にかかる事務手続きについて

### 第2部

1. アクティブ・インストラクターになろう！
2. 質疑応答・意見交換

\*発表・報告題目について、事前に示されたプログラムからの変更有。

以下、当日の提題者と記録者が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育基盤センター調査研究部が編集をおこなった。第1部「1. 開会の挨拶」「5. 全学共通教育にかかる事務手続きについて」は、報告を割愛した。なお、「5. 全学共通教育にかかる事務手続きについて」では、今年度との変更点として、出席管理の厳格化、公欠を欠席扱いとしないことの徹底等、について説明がなされた。

## 第1部

司会：葛城浩一（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

記録：西本佳代（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

### 1. 全学共通科目に関する DRI 教育の新規プログラム及び変更点 ～ネクストプログラム「DRI イノベーター養成プログラム」を中心に～

鶴町徳昭（大学教育基盤センター創造教育推進部門長）

DRI 教育とは、本学で展開されている、新たな価値創造のための学士課程教育である。Design thinking：イノベーションを創出する「デザイン思考」、Risk management：レジリエンスやセキュリティ等に資する「リスクマネジメント」、Informatics：専門分野を超えた「インフォマティクス」の頭文字をとり、DRI と呼んでいる。本学では、(1) DRI 能力を育成するための基盤的教育、(2) より高度な DRI 能力を育成するためのネクストプログラム、(3) DRI 能力を育成するための FD プログラム、の 3 つの取組を通して、学士課程教育の更なる充実を図る。本日は、その中でも (2) より高度な DRI 能力を育成するためのネクストプログラム、について紹介する。

DRI イノベーター養成プログラムの目的は、履修した学生たちが、DRI を通して、あらゆる人間が安心して生活できるためのイノベーションを創造できるようになることにある。具体的には、他者に対する共感を基盤とするデザイン思考を活用し (D)、人々が共に幸福に生きる、安全安心な社会の実現を目指し (R)、ビッグデータや ICT をはじめとしたツールを駆使して (I)、現代社会が抱える諸問題を解決し、よりよい社会をつくり出す人材「DRI イノベーター」を育成する。プログラムの特徴としては、(1) D コース、R コース、I コースの 3 コース制、(2) 「はじめて学ぶ DRI」と「DRI イノベーター養成プログラム課題研究」は必修、(3) 全学共通科目 4 単位以上＋学部開設科目 4 単位以上の 12 単位以上の構成、が挙げられる。2020 年度のプログラム開設に向けて、準備は整いつつある。今後は、プログラムの更なる拡充のため、創造工学部や経済学部以外の学部における DRI 教育の展開の可能性を探ることが求められる。

(以上の内容を鶴町創造教育推進部門長が報告した後、林敏浩前大学教育基盤センター ICT 教育部長より、「数理・データ教育の強化～情報リテラシー B の概要～」と題して説明がなされた。) 本学では、現行の情報リテラシーが再編され、次年度より「情報リテラシー B」の提供が始まる。「情報リテラシー B」は、香川大学に入学した学生が文系理系を問わず初年次に身につけるべき数理・データサイエンス教育の基礎を学習するために、1 年次生対象に開講される必修科目であり、e-Learning で提供される授業である。今や、文系理系を問わず大学低年次での数理データサイエンス教育を推進することが全国的に求められており、大学における数理・データサイエンス教育強化方策に基づく改革の一環として、「情報リテラシー B」の新設が行われる。

## 2. 主題B科目の実質化とデザイン思考教育 ～授業のタイプ区分とタイプ別事例紹介～

小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）

主題B「現代社会の諸課題」は、現代社会が直面する諸問題をテーマとして、学生の課題発見、課題解決能力を育成する科目と定義されている。一方、デザイン思考は、デザイナーがデザインを行う過程で用いる特有の認知的プロセスのことを指し、共感（Step1）、問題定義（Step2）、創造（Step3）、プロトタイプ（Step4）、テスト（Step5）の5つのステップを踏む。この過程のうち、Step1～2が課題発見、Step3～5が課題解決、にあたりと解釈することができる。主題B授業タイプは、課題発見＋解決型（学生主導）タイプⅠ、課題解決型（学生主導）タイプⅡ、課題発見型（学生主導）タイプⅢ、課題理解型（教員主導）タイプⅣに区分される。授業事例として、タイプⅠは「戦後の日本経済－戦後復興から東欧・ソ連の崩壊まで」「日本の歴史と現代社会B」、タイプⅢは「農業バイオテクノロジー」、タイプⅣは「水の活かし方、治め方 その1」が挙げられる。タイプⅡについては、該当者が少なく、紹介することができなかった。

## 3. 第4期中期計画を見据えた全学共通教育にかかる課題の抽出について

寺尾 徹（大学教育基盤センター共通教育部長）

第4期中期目標期間に向けた全学共通教育の課題の抽出を行うため、調査研究部のもとに検討WGを発足し、話しあいをすすめてきた。その結論として得られたのが、「幅広い学び」をキーワードとする全学共通教育改革である。具体的には、「幅広い学び」の理念や位置づけを明確化し、2020年7月までに、それに基づいた科目領域の再編と科目区分の見直しの結論を得たいと考えている。なぜ、「幅広い学び」が必要とされるかという改革の背景について、一つには、普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていく必要があるから、という回答を挙げることができる。これは、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において、予測不可能な時代を生きる人材像のひとつとして紹介された内容である。また、もう一つには、幅広い学びは、専門を深めるほど必要となり自覚されるから、という検討WGの回答も挙げることができる。今後は、「幅広い学び」の理念に基づいて、各科目区分の諸課題を解決するための改革方針の素案を検討すると共に、全学での議論の共有をはかるための工夫が求められる。

## 第2部

司会：角道弘文（大学教育基盤センター調査研究部長）

記録：佐藤慶太（共通教育コーディネーター／大学教育基盤センター）

### アクティブ・インストラクターになろう！～能動的な学びの場づくり～

岡田徹太郎（経済学部教授）

第2部では、経済学部の岡田徹太郎教授を講師に迎え、「能動的な「学びの場づくり」を学生役で体験」というコンセプトで、ワークショップ（以下WS）が行われた。以下では、紙幅が許す範囲でWSの展開が分かるようにまとめてみた。

- ①グループ作り、グループ分け（あわせて、グループ作りのポイントの説明）
- ②参加者調査（参加者の所属をカードで確認。あわせて意思表示カードについても解説）
- ③岡田先生のグループワーク（以下GW）の入れ方について〔レクチャー〕
  - ・90分授業で、GWは通常3回、計14分。
  - ・チェックイン（アイスブレイク）、ミニGW（3分）、メインGW（8分）という構成。
- ④アイスブレイク（自己紹介、好きなこと、忙しさ自慢、今の気持ち、などを話す）
- ⑤固定機の教室におけるGWについて〔レクチャー〕
  - ・固定機の教室でも、横並び3人ワーク、前後4～5人ワークなどが可能。
  - ・5人ワークの時は、二列でグループをつくり、前列中央を開けておく。
- ⑥香川大学経済学部におけるデザイン思考教育について〔レクチャー〕
  - ・各種のプロジェクト教室の中でのWSで生まれる「共感（empathize）」が出発点。
  - ・共感から得られた「気づき」を共有しながら「課題設定（define）」する。
  - ・設定された課題を解決する「創造と想像（ideate）」を広げる。
  - ・創造と想像を駆使し「表現（prototype）」する。
  - ・創造と失敗をフィードバックし、解決策を「検証（test）」する。
- ⑦デザイン思考型＋AL型授業のタイプについて〔レクチャー〕
  - ・教員と学生との双方向型〔教員主導〕と学生同士のやり取り中心型〔学生主導〕が考えられ、岡田先生は後者を目指している、とのこと。
- ⑧課題設定の際のポイント〔レクチャー〕
  - ・専門知識に裏付けられた課題設定が重要。
  - ・教員と学生の「生産的なやり取り」が、学生同士の「相互作用」を生む。
- ⑨ミニグループワーク、メイングループワークの事例紹介と体験。
- ⑩カードを使って「楽しむことができたか」を確認し、終了。

ワークショップでは、参加者が楽しんで取り組んでいる様子が印象的であった。終了後の質疑応答のコーナーでも、活発な意見交換がなされていた。主なものを紹介したい。

- Q. [上記⑥の部分に関連して] デザイン思考における「検証」は、経済学部の場合、具体的にどのような手続きとして考えられるのか。
- A. 経済政策においては、当のアイデアが「政策に反映されているか」が検証の基準となる。もしされていない場合、なぜ反映されなかったかを考えることも勉強になる。いいアイデアなのに、政策に反映されない場合、政治的な問題が絡んでいることもあり、そういったことに目を向けることも重要である。
- Q. グループワークの評価はどのようにしているか。
- A. 現在の仕組みについていうと、出席と、きちんと書いたワークシートを提出で20%、まとめノートで20%、Moodleの小テストで10%、期末テストで50%としている。グループワーク活動をどのように評価に反映するかは、悩ましい問題である。
- 関連してのフロアからのコメント：グループワークの評価の事例として紹介したいことがある。グループワークのアウトプットとして、グループワークをして本人が何に気づいたのかを書かせる、またグループのメンバーを評価する（ピア評価）といった方法が考えられる。
- Q. デザイン思考型＋AL型授業のタイプについて説明があった〔⑦の部分〕。そこで、講義型と、講義＋AL型1、講義＋AL型2が区別されていたが、後二者の違いはどのような点にあるのか。
- A. 講義＋AL型1は、教員主導でおこなうもので、講義＋AL型2は、学生が主体的に話し合い、教員がサポートに回る、ということ。後者の方が工夫が必要と考えている。
- Q. ご自身の取組をどのように評価しているか。
- A. 学生による授業評価で「授業に参加させる工夫」の数値が上がっている点で、一定の成果が挙げられていると理解している。
- Q. AL型に慣れていない教員におすすめの「はじめの一步」のワークはあるか。
- A. まずは学生の顔を見る。それから板書の前に1分間考えさせる。その次のステップとして、隣の学生と話し合わせる、というふうに進めてみてはどうか。
- Q. TA、SAが手伝っているという話があったが、どういったところで手伝いが必要なのか。
- A. 荷物運びからGWの活性化まで、いくつかレベルがある。大人数講義だと、必要なものを教室まで運ぶのも大変なので、それを手伝ってもらうこともある。TAの場合は、不活発なグループや、難しい問題に突き当たったグループのサポートをする、といった仕事もある。

全学FDで大規模なワークショップ型研修を行う、というのはおそらく初めての試みであったと思われるが、参加者も楽しく参加し、得るものも多かったように思う。